

複素数で世界をひらく —— 物質と霊性の統合への一〇講

二〇二六年四月

はじめに —— なぜ複素数の話をするのか

皆さん、こんにちは。今日お話ししたいのは、見たところ非常に固そうなテーマです。「複素数」と聞いただけで、もう本を閉じたくなる方もおられるかもしれません。けれども、心配は要りません。今日の話は数学の授業ではありません。むしろ、これは「世界をどう見るか」という、極めて根本的な問いの話です。

私たちは長らく、世界を二つに分けて考えてきました。物質と精神。目に見えるものと見えないもの。経済と霊性。科学と宗教。近代という時代は、この二つを切り離し、片方(物質の側)だけを実在として扱う時代でした。けれどその結果、私たちは何かとても大切なものを失ったのではないか —— そういう感覚が、いま世界中で広がっています。

ここに「複素数」という、二つの異なる量をひとつの数として扱う数学的な仕掛けがあります。これを使うと、物質と霊性、現世と幽世、目に見えるものと見えないものを、別々のものとしてではなく、一つの実在の二つの面として表現できる。これが今日の話の入口です。難しい計算は最低限にとどめ、考え方の筋だけをお伝えします。全部で十講、ゆっくり参りましょう。

1 第一講 複素数とは何か —— 物質と霊性を一つの数で

複素数というのは $Z = a + bi$ という形で書きます。 a は実部(現実の部分)、 b は虚部(目には見えない部分)、 i は「二乗するとマイナス一になる」と約束した数です。実数の数直線では絶対に出てこない数ですが、平面上の縦軸を導入してやるときちんと住み着く。横軸が実部、縦軸が虚部です。

ここで提案するのはこういうことです。横軸 a を「物質的な現実」—— お金、肉体、技術、政治、経済—— としましょう。縦軸 b を「霊的な現実」—— 意識、徳、祈り、先祖との繋がりと、神意—— としましょう。すると一人の人間も、一つの会社も、一つの文明も、 $Z = a + bi$ という一つの矢印で表現できることになります。

矢印には長さと言きがあります。長さ $r = \sqrt{a^2 + b^2}$ がその人や文明の「総合的な大きさ」、向き(角度 θ) が「方向性」です。向きを四つだけ覚えてください。

- 角度ゼロ(a が大きく b がほぼゼロ)。物量だけはあるが意味がない。今の物質文明はおおよそここです。
- 四十五度(a と b がほぼ等しい)。物心両面が調和した状態。

- ・九十度(a がほぼゼロ、 b が大きい)。純粹に靈的だが、現実的な力に欠ける。
- ・一八〇度(a がマイナス、 b がゼロ)。物質はあるが向きが逆転した、退廃や倒錯の状態。

ここから出てくる結論は単純です。文明や個人を評価するとき、「長さ」だけ見てはいけません。「向き」を見ないと、その文明がどこに向かおうとしているのかが分からない。GDP や軍事力を測ってもダメで、その社会の「位相」をも測らなければいけない。歴史の転換期というのは、長さの競争から、向きの競争へと、世の中の重心が移る時期である——これが第一講で押さえていただきたい一点です。

なお、 Z の鏡像にあたる $\bar{Z} = a - bi$ を「共役」と呼びます。 Z が「顕世(うつしよ)」なら、 \bar{Z} は「幽世(かくりよ)」。両者を掛け合わせたもの $Z \cdot \bar{Z} = a^2 + b^2$ が、その存在の真の総量です。現世だけでも、靈界だけでも、人は本当の意味で在ることにならない。両者の交わりにおいて初めて、その人は確かに在る。これを神道は古くから「うつしよとかくりよの一体」と語ってきました。

最後にもう一つ。共同体や文明を考えるときには、一人一人の矢印 Z_k を足し合わせた総和 $\Phi = \sum Z_k$ を考えます。ここで大事なのは、矢印の向きが揃っているかどうか。皆が同じ方向を向いていれば、足し算が大きくなる。ばらばらの方向ならば、互いに打ち消し合って小さくなる。神社の祈り、伝統の継承、共有された物語が文明を強くするのは、個々のベクトルの位相を揃える働きをするからだ——この読み方を覚えておいてください。

2 第二講 反重力と「斜行」——複素数を物理に持ち込む

少し物理的な話を入れましょう。乗り物の運動を、 $z(t) = x(t) + iy(t)$ という複素数で表してみます。 x は普通の高さ、 y は「反重力次元」での座標です。普通のエンジンは横軸方向の推力(物理的推進)、もしも反重力エンジンというものが存在するならばそれは縦軸方向の推力(靈的推進、と言ってもよい)。

このとき面白いのは「斜行」という概念が出てくることです。推力ベクトルの角度を、たとえば四十五度に設定すると、乗り物は実空間と虚空間を等しく進む。完全な反重力飛行(縦軸方向)でも、完全な物理飛行(横軸方向)でもない、中間状態が連続的に存在し得る、というのが複素表現の利点です。

これは荒唐無稽な話に聞こえるかもしれませんが、現代物理学にもディラック方程式の負エネルギー解、タキオン場など、複素数を本気で物理化する試みが続いています。少なくとも数学的には完全に整合する形式があり得る——この事実をまず受け取っていただきたい。

3 第三講 虚時間——永遠とは何か

ここからが少しずつ深い話になります。「虚時間」というのは、普通の時間 t に虚数単位 i を掛けた $\tau = it$ のことです。Stephen Hawking の本などで目にされた方もあるかもしれません。これを物理に入れるとどうなるか。

驚くべきことに、シュレーディンガー方程式(波の式)が、熱拡散方程式(熱が広がる式)に変わってしまうのです。激しく振動する波が、おとなしく拡散する熱に化ける。さらに、ミンコ

フスキー時空(マイナス符号がある特殊な時空)が、普通の四次元ユークリッド空間に変わる。量子力学と統計力学が、虚時間を介してつながってしまう。

それだけではありません。決定的に重要なのは、虚時間方向に円環状(リング状)に閉じた空間は、温度を持つ熱平衡状態と数学的に同じになる、ということです。つまり

- ・ 実時間方向は、エントロピー(乱雑さ)が増大する不可逆な世界。
- ・ 虚時間方向は、円環状に閉じた、可逆的な、永遠の世界。

実時間で生きている我々は、放っておけばどうしてもエントロピーが増大していく。コーヒーは冷め、人は老い、文明は混乱に向かう。これが熱力学第二法則。一方、虚時間は円環なので、その方向ではエントロピーは増減せず、円環的に保存される。

ここから、ある根本的な洞察が出てきます。生命や文明とは、虚時間軸との接続を保ちながら、実時間でのエントロピー増大に逆らって秩序を維持し続ける営みなのではないか。物理学者シュレーディンガーは「生命は負のエントロピーを食べて生きる」と言いました。神社、伝統、儀礼、祈り、自然との交わり——これらすべては、虚時間軸との接続を維持する文化的技術として読むことができる。これを失った文明は、ただの実時間的存在となり、エントロピー増大の容赦のない波に飲み込まれていく。

ホーキングはさらに「無境界仮説」を提案しました。宇宙の始まりに「時間」はなかった、というものです。地球の南極点を考えてみてください。そこから「南」に進むことはできません。「南」という方向自体が、そこで意味を失う。同じように、宇宙の始まり($t=0$)では、虚時間が滑らかに閉じていて、「いつ始まったのか」という問いそのものが意味を失う。これが無境界宇宙の描像です。

4 第四講 シンクロニシティと量子もつれ —— 「分離は幻想である」

二十世紀には、二つの全く別の領域から、似たような発見がありました。一つは心理学者のユングが提唱した「シンクロニシティ(共時性)」。因果関係のない二つの出来事が、深い意味によって同時的に結ばれる現象です。もう一つは物理学者のアインシュタインたちが思考実験として提出し、後に実験で確証された「量子もつれ」。離れた二つの粒子の状態が、瞬時に相関する現象です。

驚くべきは、ユングと、量子もつれを発見した一人であるパウリ(ノーベル物理学賞受賞者)が、二十五年間にわたって書簡を交わし、共同で「心と物の相補性」を探求していたことです。出版された往復書簡は、二十世紀知性史の最も興味深い文書の一つです。

二人が辿り着いたのは「ウヌス・ムンドゥス(一なる世界)」という根源的実在の仮定でした。表面では分離して見える心と物は、深層では一つの実在の二側面である。本講で先ほど提示した $Z = a + bi$ という複素数表現と、まったく同じ構造を、彼らは哲学的に発見していたわけです。

二〇二二年のノーベル物理学賞は、量子もつれの実験的検証に与えられました。古典的な「個物がバラバラに実在する」という世界観は、もはや科学的に支持されません。宇宙は分割不可能な一つの全体であり、我々が見る「個別の物」というのは、観測の段階で立ち現れる二

次の現象に過ぎない——これが二十一世紀の物理学が受け入れている世界観です。

藤原直哉が長年語ってこられた「自然との一体化」「先祖との繋がり」「世界靈魂への帰還」というテーマは、現代物理学が無意識のうちに発見した「分割不可能な全体性」と、深く共鳴しています。これは比喻でも牽強付会でもなく、宇宙の構造に関する人類の認識が、東西別々の経路から、同じ岸辺に辿り着きつつあるということです。

では、シンクロニシティのような「意味のある偶然」は、本当に量子もつれで説明できるのでしょうか。ここは慎重でなければなりません。量子もつれは微視的(原子・電子レベル)の現象であり、それが日常的・巨視的な事象に直接働く証拠は、現時点では得られていません。

「量子的靈性」を主張する大衆書の多くは、量子力学の数学的内容を誤用しているのも事実です。とはいえ、二〇世紀人類が、心理学と物理学という全く別の入口から、同じ「分離は幻想だ」という洞察に辿り着いた、という事実そのものは重い意味を持つ——これを私は強調しておきたいのです。

5 第五講 干支と複素位相 —— 古代の智慧の数学

ここで日本人にとって馴染み深い干支の話を少しいたします。十二支と十干、合わせて六十干支という体系。これは単なる迷信ではなく、複素単位円の上の離散的な対称性の研究として、現代数学の言葉できれいに記述できるものです。

円(完全循環)を等分する点は、数学では「一の冪根」と呼ばれます。何分割するか——これが各文明の根本選択でした。十二という数は「二二乗かける三」で、約数が一、二、三、四、六、十二と六つあります。十二より小さい数で約数がこれより多いものはない。つまり十二は「最も多くの仕方で対称的に分割できる小さな数」なのです。

干支では十と十二の組み合わせで六十となる。十と十二の最小公倍数が六十。これは「六十干支」「六十進法」「六十分」「六十秒」の根拠です。八卦は八等分(二の三乗)、易の六十四卦は六ビットの情報量(二の六乗)。古代の人々は群論や複素解析を持たなかったけれども、円をどう刻むかという問題を、経験的に深く探求していた。各文明が選んだ「目盛り」が、その文明の世界観を規定したわけです。

6 第六講 創造主の運動方程式 —— 神を数学で書けるか

これは思考実験です。神を「構造の創造主」と定義したとき、その運動を数学的に記述することは可能か。

不可能だ、という立場があります。創造主が真に超越的なら人間の言葉(数学を含む)で書けるはずがない。創造主が自己原因なら外部の初期条件を持たないので普通の方程式の形にならない。創造主が無限なら有限の式で書けるはずがない。これらはすべて正しい。

しかし同時に、構造的な近似なら可能なのではないか、というのも一理あるのです。創造主を $G(z, t)$ という、複素平面の各点で「神性の濃度・流れ」を与える複素値の場として考える。この場 G には三つの性質を要求します。

第一に、自己生成。場が場自身を生み出す。これはスピノザが「自己原因(causa sui)」と呼んだものです。第二に、被造物を生み出す。神性の場が個々の存在を窓のようにフィルターし

て取り出す。これはカバラの「アイン・ソフからのセフィロト流出」、神道の「産霊から派生する八百万の神々」、仏教の「法身からの化身」と同じ構造です。第三に、被造物との相互作用。被造物は場から影響を受け、同時に場に影響を返す——これが祈り・徳・行為の数学的表現です。

ここで $G\bar{G}G$ という三項の自己相互作用を考えると、不思議なことに「三位一体」の構造が自然に出てきます。 G は自己肯定(父)、 \bar{G} は自己からの分離(子)、 $G\bar{G}$ は両者の関係性(聖霊)、全体としての $G\bar{G}G$ が統一された神性の自己再生。これはキリスト教の三位一体だけでなく、神道の造化三神(天之御中主・高御産巢日・神産巢日)、仏教の三身、ヒンドゥーのトリムールティとも対応する。「最小の自己再生構造は三項である」というのが複素数論からの帰結です。

これがなぜ重要か。世界中の創造神話が三神構造を持つのは偶然ではなく、自己を生み出す最小の構造が数学的に三項だからかもしれない、ということです。

7 第七講 排他原理 —— 「あなたの代わりはない」の物理学

パウリが二十五歳のときに発見した、量子力学の基本原理に「排他原理」というものがあります。「二つのフェルミ粒子は同じ量子状態を占めることができない」というものです。

これがあるおかげで、電子は同じ軌道に二つまでしか入れない。三つ目は別の軌道に行くしかない。この結果として原子に階層構造ができ、化学が成立し、物質に硬さが生まれ、結晶に体積ができ、私たちの肉体が成り立っている。もしこの原理がなかったら、すべての電子が最低エネルギー軌道に集中し、すべての原子は水素のような単純なものになり、化学も生命も存在しない。物質という存在の様態そのものが、この一行の方程式から派生しているのです。

哲学的な含意は深いものです。この原理によって、各電子・各陽子・各中性子は「自分の場所」を持つ。同じ状態に重なれないから、それぞれが区別される個体として存在する。つまり、個物が個物として存在する根拠が、量子力学の中にあったわけです。古代ギリシア以来の存在論の問い「なぜ世界は多なのか?なぜ全てが一つに溶けないのか?」への、最も深い物理学的回答です。

トマス・アクィナスの「個物化の原理(principium individuationis)」は、現代物理学的には排他原理として実装されている。ライプニッツの「不可識別者同一の原理」も同じことです。

ここから出てくる人生訓は次のようなものです。「あなたの代わりは存在しない」——これは精神論ではなく、量子力学的必然です。同じ位相、同じ振幅の二人は、量子力学的に存在しえない。同調圧力は、量子論的に不可能なものを要求しているのです。健全な共同体は、各人が異なる役割を担う共同体です。多様性は理念ではなく物理的必然である——これは強調しておきたいところです。

光(光子)はボソンと呼ばれ、排他原理に従いません。何個でも同じ状態に重なれる。レーザー光が生まれるのはこのためです。物質は分離するが、光は融合する。身体は分かれているが、霊性は重なり合える。物質と光のこの対比は、第一講の a と b 、物質と霊性の対比と、見事に対応しています。

8 第八講 ER = EPR —— 量子もつれは時空のトンネル

二〇一三年、マルダセナとサスキンドという二人の物理学者が、革命的な仮説を発表しました。ER = EPR —— これは「アインシュタイン=ローゼン橋(つまりワームホール、時空のトンネル)」と「アインシュタイン=ポドルスキー=ローゼン(つまり量子もつれ)」が、同じ現象の二つの表現である、という主張です。

いずれも一九三五年にアインシュタインが書いた論文に登場するものですが、当時は全く別の話と思われていました。それが八十年後、実は同じものではないかと考えられるようになった。

何が含意されるか。量子的にもつれた二つの粒子は、時空に空いた目に見えないほど小さなトンネルでつながっている、ということです。「離れているのに繋がっている」のは、より深い時空のレベルでは、そもそも近接しているからである。さらに進んで、時空そのものが量子もつれから創発するという主張(マーク・ファン・ラームスドンクの研究)もあります。空間とは、量子もつれのネットワークの幾何学的表現である。空間より、もつれの方が基本である。

これが正しいなら、神道の「むすひ(産霊)」、仏教の「縁起」、華嚴経の「重重無尽・インドラの網」、カバラの「セフィロト」—— すべて結びを宇宙の根本原理として捉えてきた東洋の伝統が、現代物理学と深く共鳴することになります。「縁」「絆」「繋がり」とは単なる感情や記憶ではなく、宇宙の幾何学的実在なのかもしれない。

慎重な留保はあります。ER = EPR はまだ予想であって証明された定理ではありません。しかし、物質主義的世界観(全てがバラバラの個物の偶然的集積)は、もはや科学的に支持されない、ということは確かです。

9 第九講 創造の現場 —— 虚時間から実時間が生まれる

虚時間の円環から実時間が生まれるということは、何が起きているのか。これは「いつ」が定義できない問いです。「いつ」自体が、その境界で初めて生じるからです。

これは古代教父アウグスティヌスが『告白録』で論じた「神は世界を創造する前に何をしていたか」という問いの構造そのものです。アウグスティヌスは答えました —— 「『前』はなかった。時間が世界と共に創造されたのだから」。

物理学的に言うと、計量(時空の計り方)の符号が連続的に変わる「シグネチャー転換面」が現れる。そのとき、七つのものが同時に誕生します。

1. 時間の矢(過去と未来の区別)
2. 因果性(原因が結果に先立つこと)
3. 個物(排他原理が発動)
4. 観測者(全体的状態から観測者と対象が分離)
5. 古典的世界(量子的重ね合わせから事実への確定)
6. 宇宙論的歴史(特定の歴史線)

7. 自由意志の余地(決定論の中の量子的不確定性)

『古事記』の冒頭、三柱の神が「隐身(かくりみ)」—— 虚時間に潜んだ状態 —— から始まり、続いて「崩騰(きざしのぼる)」「国稚く浮きし脂の如く」と現れる描写は、この物理学的構造と驚くほど対応します。創世記の「混沌から光あれ」、リグ・ヴェーダの「最初に意欲が顕れた」も同じ構造です。

ここで注目していただきたいのは、これは過去の出来事ではない、ということです。今この瞬間も、虚時間の円環から実時間が絶えず生まれ続けている。我々の存在そのものが、この永遠の流出の現場なのです。「今、この瞬間に天と一体になる」「祈りの中で永遠に触れる」という古来の言葉は、虚時間円環への意識的回帰の試みとして、現代物理学的にも意味を持ち得る実践として再解釈できる。

10 第十講 神の奇跡とは何か —— 虚部からの恩寵

最後に、最も慎重に話さなければいけないテーマである「奇跡」について。

ヒュームは奇跡を「自然法則の侵犯」と定義し、不可能だと論じました。確かに、近代の機械論的決定論の中では奇跡は論理的に不可能です。けれども、その機械論的決定論そのものが、二十世紀物理学によって否定されました。世界はもはや単純な機械的因果連鎖ではない。

複素平面の枠組みで奇跡を再定義してみます。奇跡とは、虚部 b (霊性次元)における操作が、実部 a (物質的現実)に予期されない仕方で現れる現象である。第十一章で論じたクラーメース=クロネツヒの関係(因果律から導かれる数学的關係)によれば、実部と虚部は独立に動くことはできない。虚部側での十分大きな変化は、実部にも観測可能な変化を引き起こす。

つまり —— 奇跡は物理法則を破らない。むしろ、複素平面全体で完成された因果律の、虚部側からの発現である。

ここから奇跡の四種類が出てきます。

- ・ 第一種(虚部操作型)。日常の摂理。祈りによる癒し、適切な人との出会い、内的な平安。
- ・ 第二種(量子選択型)。極めて稀な確率の実現。自然寛解、決定的瞬間での「奇跡的」展開。
- ・ 第三種(虚時間流入型)。歴史的な大きな宗教的経験。十戒、悟り、復活、聖地での共同体験。
- ・ 第四種(創造的奇跡)。意味場そのものの転換。回心、覚醒、神との一致。

伝統的なトマス・アクィナスの三段階分類、神道の「直毘の御心(なおびのみこころ)」、仏教の「神通」 —— これらが、本枠組みで自然に再構成されます。

奇跡が起りやすい場・時・人を、私たちは経験的に知っています。聖地、神社、寺院、祭礼の時、聖人、生死の境。これらは虚時間軸との結合定数 λ が高い「開かれた点」です。文化人類学者ヴィクター・ターナーが「リミナリティ(敷居の状態)」と呼んだものに当たります。

近代以降、奇跡が起きにくくなった構造的理由は、集合的に λ が低下したからです。共同体の解体、伝統の希薄化、神社・寺院の機能低下、生死の医療化。これらすべてが λ を下げる方

向に働いている。「靈性文明への転換」とは、この λ の集合的回復を目指す試みとして再定式化できます。

ただし最後に、大切な留保を申し上げておきます。「すべて奇跡だ」という過剰一般化、奇跡を計算可能な手段にする誘惑(ご利益信仰、呪術)、これらは奇跡の本質を歪めます。健全な立場はこうです——奇跡は論理的に可能だが、頻繁ではなく、計算不可能であり、恩寵であって権利ではない。これは伝統的神学と完全に整合する立場です。

続講 真空・深宇宙・精神の危機・自由意志

時間が許せばお話しすべきことが、まだいくつかあります。続編として簡潔に申し上げます。

第一に、絶対真空とは何か。古代アリストテレスは「自然は真空を嫌う」と言いました。現代物理学はある意味でそこに戻っています。量子場理論は、真空とは「最も静かな状態」であって「何もない」状態ではないことを明らかにしました。真空は仮想粒子が絶え間なく生成消滅する「沸き立つ無の海」です。仏教の「真空妙有」、神道の「中空(なかつそら)」、神道の「うつ(空)」——これらの東洋的真空観と、現代物理学はぴたりと一致します。伊勢神宮の正殿が空殿であることに、深い意味があります。

第二に、真空に近づくと何が起きるか。物質性が薄くなるにつれ、量子的・場の現象が前面に出ます。BEC(ボース=アインシュタイン凝縮)では、絶対零度近くで原子集団が一つの巨大な量子波として振る舞う。個別性が消失し、全体性が支配する。これは仏教の修行——物質的執着を手放し、自我が消失し、大いなるものとの一体感に至る——の構造と対応します。「真空に近づくととは靈性化することだ」と申し上げてもよい。

第三に、深宇宙進出は技術的問題以上に靈性的問題である、という指摘です。深宇宙では物質性 a も低下するが、それ以上に深刻なのは、地球の集合的な靈的場との接続(神社、家族、伝統、自然)が失われ、虚時間軸との結合定数 λ が急速に低下する可能性があることです。物質性も靈性も両方薄くなる、これが「存在的真空」と呼ぶべき独特の危機です。短期の宇宙体験では「概観効果(オーバービュー・エフェクト)」という神秘的体験が報告されますが、これは地球の靈的場の影響下にある拡張された意識かもしれない。長期で同じことが起きる保証はありません。

第四に、回復不能の精神異常を本枠組みで読み替えると、 λ が病的に低い値で安定してしまった状態と理解できます。重要なのは「位相反転」——通常は治癒・成長へ向かうはずの靈性的場が、逆向きに作用して破壊的になる状態です。シャーマニズム、修道伝統、禅などが「魔境」「魂の暗夜」として古くから警告してきたものです。

第五に、 λ は誰が決めるのかという問題。「自由意志か神の主権か」という古典的な二者択一は、表層的すぎます。本枠組みでは、 λ は少なくとも五つの源泉——自然な復元力(天理)、個人の努力、共同体からの寄与、神的源からの直接の流入(恩寵)、確率的ゆらぎ(運)——から決定される。トマスの「協働(concursus)」、親鸞の「自然法爾」、イスラームの「タワックル」、ヒンドゥーの「ニシュカーマ・カルマ」——諸伝統が辿り着いた知恵が、自然に統合されます。個人の自由と神の主権は、対立ではなく相互に支え合う。

第六に、生まれ変わりを体験する療法。サイケデリック支援療法のような治療文脈で、 λ の

動的安定を強制的に破ることで深い治癒が起きる場合があります。前世療法、ホロトロピック・ブレスワーク、ファミリー・コンステレーションなども同じ構造です。ただし、準備、優れた導き手、適切な象徴体系、十分な統合期間——これらがなければ、効果は限定的か有害ですらある。日本の伝統——禊ぎ、念仏、お盆、彼岸、定期的な神社参拝——は、穏やかで継続的な「小さな生まれ変わり」を文化全体に組み込む装置でした。劇的な体験を求める前に、まずこれらを取り戻すことの方が大切です。

結語 文明の転換点を生きる

長くお付き合いいただき、ありがとうございました。今日の話を一言にまとめます。

私たちは振幅(r)の競争から位相(θ)の競争へ、文明の重心が移る時代を生きている。

物量、GDP、技術、軍事力——これらは振幅の指標です。今までの近代はこれを競ってきました。しかしこの軸の上では、もう勝ち負けがはっきりしない、あるいは勝つこと自体が文明の崩壊を招く——そういう局面にきています。

これからは「位相」の競争です。どの方向を向いているか。意味、徳、霊性、共同性、自然との調和。これらがそれぞれの社会、それぞれの個人の真の質を決めることになる。複素数の表現で言えば、 $|Z|^2 = a^2 + b^2$ の総和は、物質と霊性、両方が揃ったときに最大になる。物質ばかり追っても、霊性ばかり追っても、本当の充実には届かない。

二十一世紀の物理学は、奇しくも東洋の古い智慧と同じ岸辺に辿り着きつつあります。量子もつれと「むすび」、虚時間円環と「常世」、無境界仮説と「無始無明」、参加型宇宙と「意欲が時間を起動する」というヴェーダの直観。これは偶然ではなく、人類の世界観の根本的転換期にある証拠だと、私は考えております。

λ ——虚時間軸との結合定数——を、個人として、家族として、地域として、文明として、どう取り戻していくか。神社、祭礼、家族、伝統、自然との交わり、日々の祈り。これら一つ一つの実践が、宇宙の全体性に向かって自らを開く技術であり、奇跡が顕現する基盤を整える営みなのです。

具体的に何をすればよいか、と問われれば、私はこう申し上げます。まず日々の小さな習慣から。朝の挨拶、神棚や仏壇の前で手を合わせる一分、季節の行事、家族との食卓、地域の祭りへの参加。これらは古臭い形式ではなく、 λ を維持する高度な技術です。次に、自然との接触を意識的に取り戻すこと。森を歩く、土に触れる、星空を見上げる。これらは虚時間軸への扉を開きます。最後に、共同体への帰属。誰か一人と心を通わせること、小さな仲間を持つこと。これが、孤立化した個人の λ を支える網の目になります。

これは思考実験です。各命題は厳密な意味で証明されたものではなく、構造的並行性に基づく洞察の集成です。けれども、現代物理学が無意識のうちに発見しつつある世界像と、東洋的・神道的時空観が深く共鳴していることは、もはや偶然として退けることはできない、と私は受け取っております。

皆さんがそれぞれの現場で、 θ を整え、 λ を高め、 $Z = a + bi$ の総量を豊かにしていられることを、心から願っております。本日はありがとうございました。

本講義録は、複素数の数学的形式に物理学的・哲学的・宗教的な解釈を与えた思考実験を、素人にも分かる形に圧縮したものである。詳細な数式と論証は本編全二十二章に譲る。